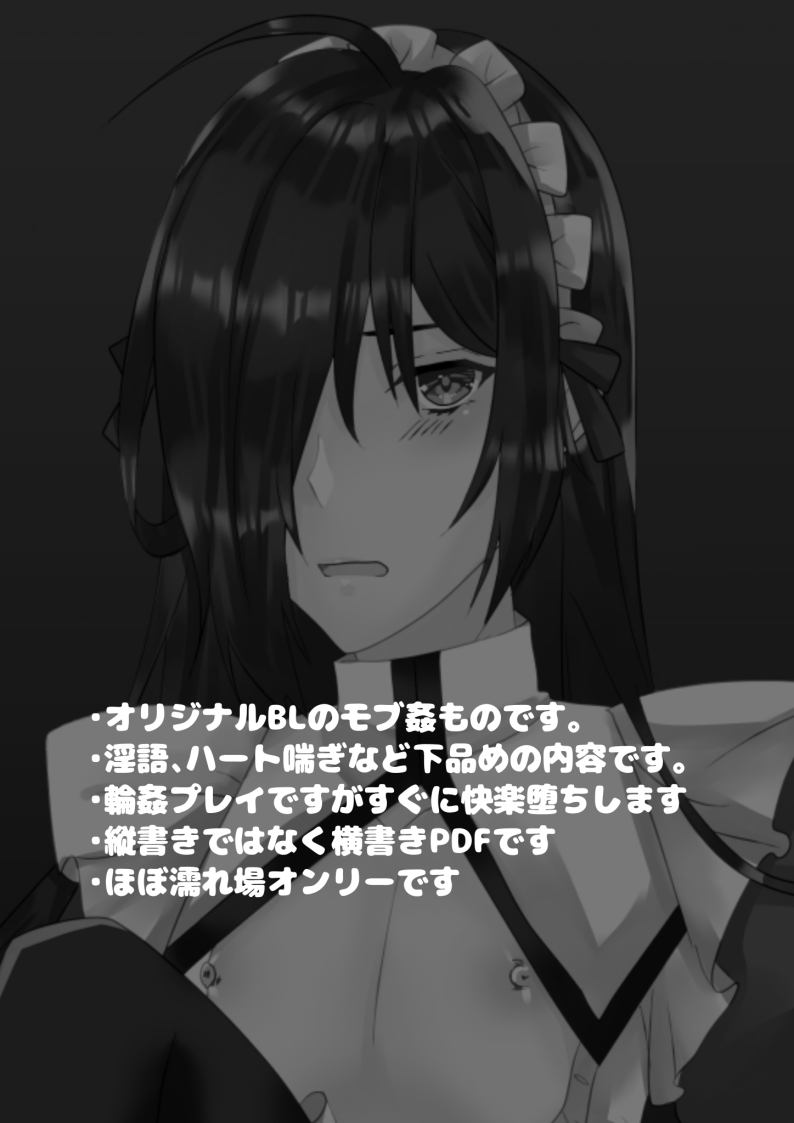
メイドさん♂をおじさんたちで囲んで堕としてみた♡

中年の極太ちんぽでメロメロ輪姦♡メス堕ち後はママ堕ちプレイ♡

体験版

colorful rain

FOR ADULT ONLY



・オリジナルBLのモブ姦ものです。
・淫語、ハート喘ぎなど下品めの内容です。
・輪姦プレイですがすぐに快楽堕ちします
・縦書きではなく横書きPDFです
・ほぼ濡れ場オンリーです

「佐伯クーン、ちょっといい？」
　背後からの声に、白い手が机を拭く動作を止める。長い黒髪を揺らして、美しい青年が振り返った。
　彼はこの喫茶店で働いているパートの店員だ。本業は翻訳家だが、週に何度か気晴らしも兼ねて外で働いている。
　主にキッチンを担当しているが、人手が足りていない時はホールに出る。実はその中性的な美しい容姿から、隠れファンも大変多い。
「はい、なんでしょうチーフ」
　声をかけてきたのはホールチーフの男だった。
「夜の営業さぁ、良かったら入ってくれない？　人手が足りなくってね」
「夜……？　夜間も営業してるんですか、ここ」
「あぁ、うん。そうそう。あんまり表立って宣伝はしてないんだけどさ。ね、頼むよ。給料は弾むから、このまま今夜手伝ってくれないかなぁ」
　申し訳なさそうに手を合わせてお願いされて、佐伯は少しばかり考える。このあと、特に用事はない。家族には連絡しておけば大丈夫だろう。
「いいですよ。俺で力になれるのなら」
「わっホント！？　お客さんすっごい喜ぶよ～♡　あ、これあげる。疲れてるでしょ？　せめてもの気持ち♡」
　渡されたのは、栄養ドリンクの小瓶だった。
「ありがとうございます、飲ませていただきますね」
「ウンウン♡　じゃ、二階に上がっちゃってよ。ロッカーに制服あるからさ♡」
「制服……このままじゃダメなんですか？」
　佐伯が今身に纏っているのは、ホールスタッフ用の制服だ。いつもしている業務と同じような内容ならこのままでもいいのでは、という問いだった。
「あー、それ一日中着てたでしょ？　あっいや、別に汚いとかではないけど、新品の制服届いてるから着替えちゃってよ」
「あ……はい。そういうことでしたら」
「うんうんっ♡　ホントありがとねっ♡　二階はそこの階段から行ってね～」
　そう促され、いつも目には入るけれど、使ったことはない階段を佐伯は上る。
　この先にとんでもない事態が待ち受けているとは知らずに……。

「って、なんだこれっ！？」
　用意されていた制服は女物――しかも、いわゆるメイド服だった。
（俺、これでも結構年いってる男だぞ！？　何かの間違いじゃ……）
「佐伯ク～ン！　まだー？　お部屋でお客様方が待ってるよ～」
「は、はいっ！」
（こ、このまま行けってことか！？　っていうか個室……？）
　疑問は湧いて止まらなかったけれど、もらった栄養ドリンクをぐいっと飲み干して、佐伯はとりあえず指定された部屋に入ることにした。
「し、失礼致します……」
　この格好を笑われたらどうしよう――そう思いながら、ドアを開く。
　すると、そこには数人の男性客がいた。全員中年程度の年齢で、佐伯の登場にわっと湧き立った。
「あ～待ってたよぉっ、かわいいメイドさんっ♡　ほらほら、こっち来て♡」
「は……はい……？」
　戸惑いながら男たちの輪の中に入ると、背後で「ガチリ」とドアの鍵が閉まる音がした。
「えっ！？」
　思わず振り返――ろうとしたところに、ぼろんっ♡　とガチガチの勃起ちんぽが晒される。
「え、えっ――」
　周囲を見渡すと――男たちはみんなずっしりとした太いちんぽを露出して、見せつけるみたいにしこしこ♡　としごいていた。
「え、こ、これはっ……？」
「え～？　決まってるでしょ♡　メイドさんのオシゴトだよぉ……♡」
「んぅっ……！♡」
　頬に「ぬるぅっ♡」と先走りで濡れそぼった亀頭を押し付けられる。かと思えば、我先にと詰めかけてきたちんぽで顔を取り囲まれ、好き勝手に顔ズリされてしまう……♡
「んぁっ……♡　や、やめてくだ、さっ……♡」
　すごく不快なはずなのに――不思議と、ちんぽに対する嫌悪感はまるでなかった。むしろ、愛おしいような……もっともっと触れほしいような、そんな気持ちが湧いて、佐伯はすっかり欲情してしまっていた。
（な、なんでぇ……♡　もしかして、あの栄養ドリンク……何か変なもの混ぜってたんじゃ……）
　そう思ってももう後の祭り。ずっしりしたキンタマや、パンパンの竿でずりゅずりゅ♡
　とその綺麗な顔を犯されてしまう……♡
（だめぇ……♡　ちんぽの匂い、スゴイっ……♡　ヨダレ出ちゃう……♡）
「はぁ～♡　とろん♡　とした目でちんぽ見つめちゃってどうしたのかな……？　おちんぽ欲しくなっちゃった？　お口まんこでおしゃぶりしたくなっちゃったかな……？♡」
　ぺちぺち♡　とちんぽで頬をビンタされながら問われる。
「そ、そんなこと……っ♡」
「そんなこと言っちゃってぇ♡　ちんぽに熱烈な視線送っちゃってるくせに……♡　おじ

さんたちねぇ、佐伯クンとえっちなことできるって聞いて一週間おちんぽ洗ってないし、オナニーもしてないよ♡　濃ゆ〜いおちんぽの臭いとぱんっぱんに膨らんだおちんぽ様にメロメロになっちゃうのはメスメイドさんとしてしょうがないことなんだよ……♡♡♡」
　にゅるにゅる……♡　佐伯を囲んだ凶悪なほどの太マラたちが、ちんぽで顔をしきりにマーキングしてくる……♡　むせかえるようなおちんぽの臭いに、佐伯はすっかり正気を失っていく……♡
「ほらほら♡　かわいくおねだりしてよぉ♡　ご主人様たちのおちんぽおしゃぶりしたいです♡　って……♡　口まんこ好きなだけ使ってザーメンぴゅるぴゅる出してください♡　って♡」
「ぅ、そ、そんなことぉ……♡」
「あれれ〜？　ヨダレだらだらにしちゃってるよぉ？　おちんぽしゃぶりたくてしょうがないって顔してる……♡　素直になっていいんだよ♡　オンナノコとしておちんぽ欲しくなっちゃうのは当然のことなんだからね♡♡♡」
（も、もうダメっ……♡）
　しつこくしつこく顔をチンポズリされ、佐伯はとうとう我慢の限界を迎えてしまった。
「ご……ご主人様たちのおちんぽおしゃぶりしたいです……っ♡　口まんこ好きなだけ使ってザーメンぴゅるぴゅる出してくださいっ♡♡♡」
「んふっ♡　いいよぉ♡　そんなに言うならたっぷりおちんぽしゃぶっていいよぉっ♡♡♡」
「ありがとうございまひゅ……♡　ん、ちゅる……♡♡♡」
　許しを得て、佐伯の舌は目の前の熱いちんぽに触れる。
（うぅ……♡　美味しいっ……♡　おちんぽおいしいっ♡♡♡　なんでぇ♡　こんなの臭くて汚いだけのはずなのにぃ……っ♡♡♡）
　じゅるるるぅっ♡　ちゅるるっ♡　じゅぶっ♡　じゅぽぉおおおぉっ♡♡♡
　一度舌をつけたらあとはもう止まらなくて、すっかり脂ぎった中年ちんぽに熱烈なディープキスをしてしまう。
「あ〜いいよぉ♡　たどたどしいのに貪欲な口まんこイイっ……♡　おちんぽ美味しい？」
「おぃひぃ、れふ……♡♡♡　んちゅっ、れろぉっ……♡　おちんぽおいひくて、おしゃぶり止まらないれふ……♡♡♡」
　気が付けば、佐伯は目の前に並んだちんぽを順番にむしゃぶっていた。
「あ〜えっちだなぁ♡　早速おちんぽテイスティングしちゃってぇ♡♡♡　極太ちんぽまだまだいっぱいあるよぉ〜♡　ほら♡　キンタマにもしっかりキスしておしゃぶりして♡」
「んむぅっ……♡」
　口の中にキンタマを押し込まれ、佐伯は夢中でむしゃぶりつく。その様子に、男たちはすっかり満足げに下卑た笑みを浮かべる。
「ぁむ……♡　キンタマ、ぱんっぱんれっ、おいひぃれふっ……♡♡♡」
「そうでしょ？♡　今夜は全員のザーメンタンク空にするまで終わらないから、しっかり精子搾りしておちんぽ様にご奉仕をするんだよ♡♡♡」
「ふぁい……♡♡♡　おちんぽ様にご奉仕しまひゅっ♡♡♡」

「素直でカワイ〜♡　あ〜もう限界っ♡　出るっ♡　熟成特濃ザーメンしっかり受け止めろッ！　ウブウブ口まんこに中出し種付けするぞぉッ♡♡♡」
　ぴゅるるるるるっ♡　どぴゅどぴゅっ、どぴゅるるるるるぅっ……♡♡♡
　男たちの特濃精子が佐伯の口内、顔、体に勢いよく降り注ぐ。
「んむぅぅうっ♡　ふぉ゛っ゛♡　んくっ、んっ……♡♡♡」
　喉の奥深くまでちんぽを突っ込まれ、大量すぎる射精を受け止めた佐伯が、喉を鳴らしてザーメンを嚥下していく。
「ぷはっ……♡　濃厚ザーメンおいひぃっ……♡♡♡　全身雄精子の臭いでクラクラすゅっ……♡♡♡」
「あ〜気持ちよかったっ♡　最高に気持ちいい射精ができたよ♡♡♡」
「佐伯クン、思ってた通りザーメン似合うお顔してるね♡　精子ぶっかけられたお顔見てるだけでちんぽまたバッキバキになっちゃうよ……♡♡♡」
　ぬりゅっぬりゅっ♡　男たちのチンポでの顔ズリがまた始まる。顔、髪、手のひら、口内にちんぽで雄精子をぬりゅぬりゅ塗り込んで、しっかりマーキング……♡
「ふぁ、ぁんっ……♡♡♡　おちんぽ様、もぉこんなガチガチになってりゅ……♡♡♡」
「そうだよぉ♡　佐伯クンがスケベすぎるからすーぐチンポ勃起しちゃうんだよ♡　責任とって今度は体でご奉仕してねっ♡」
　男たちの手がするりと佐伯のブラウスのボタンを外す。すると、ぺろん♡　と胸のところが開いて、白い胸とツン♡　と勃起した乳首が露わになってしまう。
「お〜っ♡　想像通りのピンクい乳首っ♡　えっちだねぇ♡♡♡」
　男の手が乳首を「くにっ♡」と摘み、すっかり敏感になってしまっている佐伯は「ひぅっ♡」と背筋をそらして反応してしまう。
「カワイイ反応……♡　乳首敏感になってるねっ♡」
「あっ、やっ♡　指でっ、くにくにしなひでくだひゃいっ♡♡♡」
「指はやなのぉ？♡　じゃあ、これはどうかなぁ♡♡♡」
「ひぃんっ♡」
　すっかり勃起した両の乳首に、ぬらぬらと先端が光るちんぽが擦り付けられる。
　ぬっちゅぬっちゅぬっちゅっ♡　ぬるぬるの亀頭が乳首をしきりに弾き、先走りとさっき出したばかりのザーメンもしっかり塗り込んでおちんぽマーキングしてゆく……♡
「ふぁんっ♡　ぁ、あ♡　らめぇっ♡♡♡　おちんぽでグリグリされたら、おかひくなっひゃぅっ♡♡♡」
「おかしくなっちゃいなよぉっ♡　あ〜コリコリの乳首きもちいいっ♡♡♡　ちんぽズリに最適すぎるドスケベなメス乳首……っ♡♡♡」
「クリちんぽもすっかり勃起しちゃってるねっ♡　スカート押し上げちゃって……えっちだなぁ♡♡♡」
「い、言わないれぇっ……♡♡♡」
　男の言う通り、佐伯のクリちんぽはフル勃起してしまっていて、先端から先走りをとろとろぉっ♡　と垂れ流していた。
「でもクリちゃんは触らないよっ♡　メスメイドさんとして、乳首とかおまんこでメスイキしっかり覚えようねっ♡♡♡」